

セブンサミッツをガイドする

倉岡裕之さん

セブンサミッツをガイドする倉岡裕之さんは、2007年には、71歳のエベレスト登頂者に同行するなど、ラッセル・ブライス氏のヒマラヤン・エクスペリエンスのチームにも参加する、日本人で数少ない高所ガイドとしてご活躍中です。 (インタビューと文：張晶子)

◆早速ですが、海外登山のトイレ事情など教えていただきたいのですが。

—マッキンリーでは、フタ付きのプラスチック缶がトイレとして、2人に一つ貸し出されます。

アコンカグアも、最近マッキンリー方式になった上に、持ち帰らなければ罰金(番号記入済みの袋を失くしたら\$200)が科せられるようになったのですが、配

布されるのが、普通のプラスチック袋で、マッキンリーに比べて気温が高いアコンカグアでは、排泄物が凍るわけではないので、あまり歓迎されないシステムですね。

エベレストでは、公募隊はみな、BCでは、プラスチック製の樽を埋めてトイレをつくり、それを持ち帰るようにしています。一つ日本円で1500円程度のもので、工業製品の廃物利用です。チベット側はティンリという村まで、ネパール側ではゴミをナムチェバザールまで、運びます。上部では、トイレの設置は無く、特に約束事も無いので、携帯トイレを使用するかどうかは、各隊または各個人にまかされています。ネパールでは、SPCCが隊ごとにゴミのデポジット代を徴収し、行きと帰りの缶の数量などを確認し、足りないと返却しないということも始めています。

ビンソンマシフ(南極)では、以前から薬品入り2重のジップロック袋ですね。

キリマンジャロのマラングルートの各ハット(山小屋)では、汲み取り方式でしょう。

エルブルース(ロシア連邦)は15回行ってますが、トイレは設置されているものの、回収はされていないと思います。

カルステンツ(インドネシア)では、現地の人に「ゴミを捨てない」ことの意味を分かってもらうのが難しい。昨年、新しいルートができてから、まだ入山している隊も少ないし、環境が変わってしまうということがまだ実感されていないのだと思います。ある意味、こんなところがまだあるのは幸運なことかもしれません。

訪れる人が増えれば、現地の意識も変わってきますが、どこでもオーバーユースの問題は抱えることになると思います。

◆山と付き合うようになったきっかけは何だったのですか。



ビンソンマシフ頂上にて

一生まれは池袋です。小学校5年生のときに、たまたま本屋で見かけた本の表紙に、青い空をバックに黒い岩を登る人の姿があったんです。剣の岩場でした。確か「登山入門」の本でした。その表紙を見たときに、子ども心に「これだ!」と何かが決まってしまったんですね。母が山の経験があったので、靴など必要な装備を教えてもらいました。

中学に入ると、丹沢に通い、鍋割山荘は馴染みになるほどでした。その頃はヨーロッパの登山の映画や本に夢中でしたね。高校には山岳部がなかったので、手賀沼で10kmのタイムトライアルを毎日欠かさずやりました。大学に入ってから、登攀クラブ蒼氷でクライミングを始めました。

25歳のとき、映画「植村直己物語」の撮影で仕事でエベレストへ行き、戻って最初のクライミングで懸垂下降の失敗で骨盤と肋骨を骨折する怪我をしてから12年くらいプライベートクライミングをやめた時期がありました。37歳で人口壁のクライミングを勧められ、菊池敏之さんの指南でまた登るようになりました。

◆海外登山も中高年の姿が目立つようになったと思われませんが、同行して感じるのはどんなことですか。

一海外登山ガイドを始めた20代のころは、40代はグループの最年長でしたが、今では、60代どころか70代の方も海外の山に出掛けている。みなさん健脚な方ばかりですが、女性の方が強さが目立ちますね。男性は、リタイア以前の方は歩きこむ時間が無かったり、リタイアしてから始めた人も少なくないですから。歩きは女性が強いですね。フリークライミングをしている方は、高所でも強いですよ。無駄な脂肪が増えないのと脚にも余計な筋肉が付きすぎないのが良いのではないかと思います。膝に問題を抱えている人は多いのですが、みなさん頑張っておられます。

面白いのは、日本人の女性は、お湯に強い執着があるということです。男性も、その他の国の人でも、そういうことはありません。就寝前に2ℓのお湯を準備するのは、日本女性の特徴ですよ。

◆どういうきっかけで、海外登山をガイドするようになったのですか。ラッセル・ブライストの出会いはどうなものだったのでしょうか。

一海外登山ガイドは、25歳のときからやっていましたが、1996年に、ラッセル・ブライス隊でチョーオユーに入山していた田部井さんに会ったんです。こちらは日本人3人に同行していて、ツェルマット在住のカメラマンの田村氏とシャモニ在住のラッセルが、その後親交を深めたこともあり、2003年からラッセル・ブライスのヒマラヤン・エクスペリエンスに、田村氏と2人で日本人対象のガイドとして活動することになったのです。

◆HAT-Jではアジアの青少年の交流登山を重ねていますが、若い世代に対する環境教育について、何か思うところはお有りでしょうか。

一それは、やはり重要なことだと思いますよ。直面している事実を伝えるということはした方が良いでしょう。ゴミを持ち帰るとか、トイレ紙は持ち帰るとか、具体的に出来ることを教えてあげることも大事です。体験する機会を作ってあげることで、自然が好きになって、ケータイで遊ぶことばかりに時間を費やすこととは別の世界が広がれば良いでしょうね。

◆カルステンツからお帰りになって一週間足らず、三週間後にはエベレストに向けて出発と

いうタイミングでお話を伺うことが出来たのはラッキーでした。プロであれアマであれ、自然が好きであることが環境を考える土台なのだと感じたインタビューでした。ありがとうございました。